

趣旨説明——「死をめぐる生命」——

森村 修

比較思想学会では、二〇一四年から三年の計画で「思想としての生命」というテーマで、連続パネルを開催してきた。初年度の二〇一四年七月の大会では、第一回「出生と生命」と題して、「生命」の人間学的な意味や生命倫理的な問題が検討された。議論としては、最近の医療技術や科学技術の進歩によって、生命が操作され、道具・手段化される傾向にあるけれども、実際には、生命とは、私たちが安易に操作できるものではなく、「無条件に与えられる」ということを確認した。

翌二〇一五年六月の大会では、第二回「生命観の再検討―生きていくとはどのようなことか」と題して、「生命を生命たらしめているものはいったい何か、また、それを自覚している私という生命とは何者なのか」という問題が検討された。特に第二回では、人文系の学会としては異例のこととして、生命科学と哲学・思想との領域横断的な議論が展開された。特徴的

なのは、生命を物質に還元する物理主義でもなく、精神を物質から独立した実体とみなす二元論や生気論を回避しつつ、「生命」概念を再構築する必要性が共有されたことにある。

これらの二回の議論を受けて、二〇一六年六月の最終回は「死をめぐる生命」と題して、生・生命の否定としての「死」という問題を取り上げた。「思想としての生命」というテーマの中でも、最大の難問である「死」について、パネリストの方々がどのように思考し、議論を組み立てていくかが今回の重大なポイントとなった。今回のパネリストは、渡辺恒夫氏（東邦大学）、浅見洋氏（石川県立看護大学・西田幾多郎記念哲学館）、冲永宜司氏（帝京大学）の三人であった。

渡辺氏は「フッサール現象学による幼少期の自我体験の解明から輪廻転生観へ」と題して、フッサール現象学をあえて「フッサール心理学」として読み替え、幼少期の子供たちが体験す

る「自我体験」の解明に「フッサール心理学」的なアプローチを適用するという大胆な試みを披瀝された。筆者のような現象学者から見ても、本発表は興味深いものであった。渡辺氏によれば、幼少期に体験される「私は私だ!」とか「私はなぜここに居るX・Yであって他の誰かではないのか?」などの「自我論的体験」をフッサール心理学的に解釈する。しかも渡辺氏は、現象学者クラウス・ヘルトのフッサール現象学的「他者論」解釈をさらに発展させて、独自の時間論解釈を提示した。

浅見氏は「田辺元における死者と生者の実存協同について」と題して、田辺元の「死の哲学」に言及し、そこで展開されている「死復活」に基づく「死者と生者の実存協同」の思想を「エンドオブライフ(EOL)」の視点から展開された。田辺は、妻ちよの死後、六〇代の「懺悔道の哲学」をさらに徹底し、「死の哲学」を語り始める。同氏によれば、田辺は実存協同の典型を「カトリックの聖霊の交わり(Communio sanctorum)」と「菩薩道」に求める。さらに浅見氏は、田辺の「死の哲学」の中に「断絶した死者と生者の関係の再構築の可能性と意義」を見出し、「悲嘆の中にあるながら、関係を失うことのない、新たな喪の仕事が立ち上がる」可能性を指摘する。

最後に、「思想としての生命」のパネルの企画者でもある沖永氏は、「生死の矛盾をつなぐ生命―三年間を総括して」と題して、これまでの二回のパネルを踏まえて、生死の区別と無区別としての生命という見解を展開した。沖永氏によれば、生死

を一人称的な観点や三人称的な観点から見ることが、直線的時間観念に基づいていることを指摘し、それは異なる時間観念として「球面的時間観念」を提起された。そして、沖永氏は、二つの異なる時間観念が世界を構成することで、両者の時間を「つなぐ」ところに「生命」を位置づけるのである。

筆者にとっても「思想としての生命」のテーマで「死」の問題を語ることは大変興味深いことであった。筆者の理解では、私たちは、単なる個体的生命(ビオス)としてだけでなく、根源的生命(ゾーエー)の流れの一部としても生きている。その意味で、私たちの生は、その生を生きる〈私〉にとっても存在するのではなく、〈あなた〉と共に生きることも含まれている。つまり、〈あなた〉が死ぬことによつて、〈あなた〉と共に生きている〈私〉(の一部)もまた死ぬ。根源的な生命の観点から見れば、生きているということ(＝生命をもつということ)は、〈私〉と〈あなた〉とが「共に生きている」という意味でもある。それゆえ、〈私〉や〈あなた〉という人称代名詞は、互いに入れ替え可能な関係性を表わしており、そこには、根源的生命を基礎にする「関係の絶対性」が存在している。筆者の理解では、田辺元の「実存協同」とは、妻ちよに先立たれた田辺が、〈私〉と〈あなた〉の「関係の絶対性」に基づく根源的生命を共に生きる場としての〈協同態〉において、生者や死者という存在状態の境界を突破しようとする思想であるといえる。

(もりむら・おさむ、現象学・日本哲学・倫理学、法政大学教授)